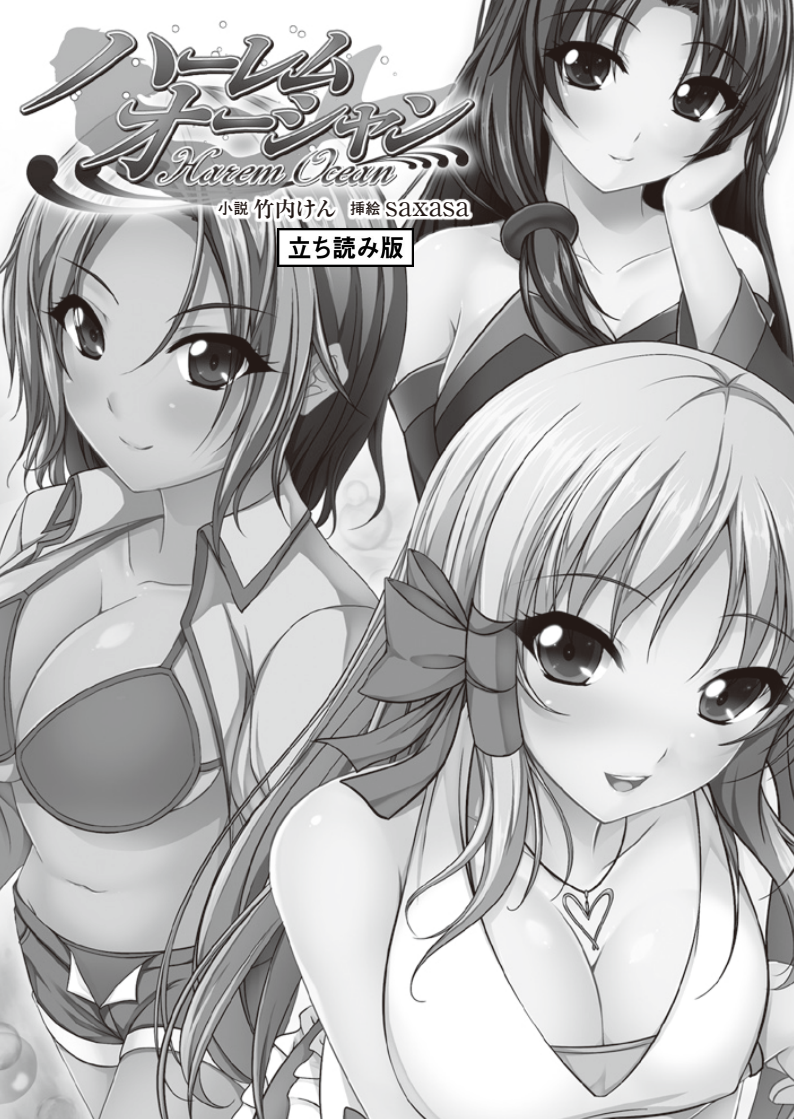
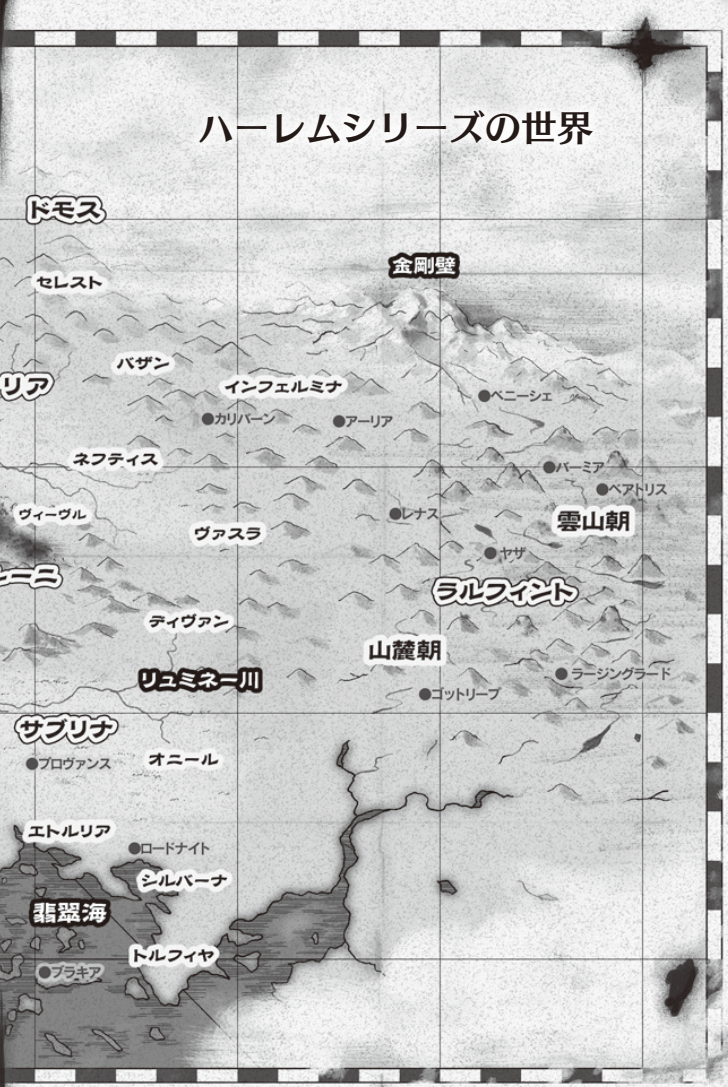
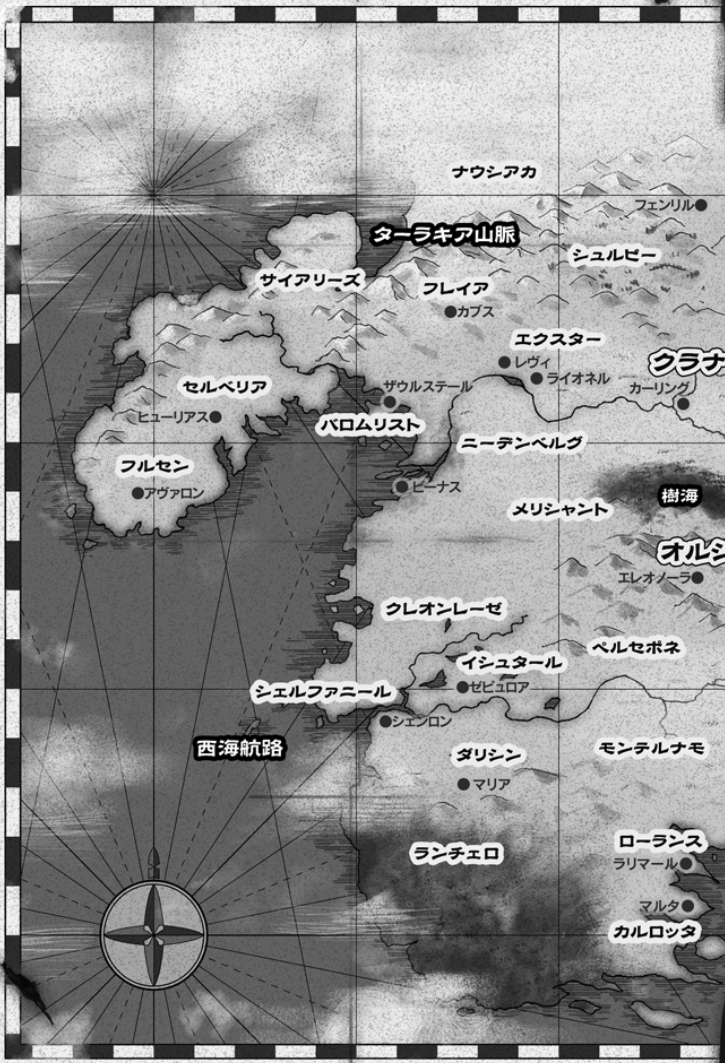

ハーレムオーシャン
Harem Ocean
小説 竹内けん 挿絵 saxasa
立ち読み版

ハーレムシリーズの世界




ナウシアカ
フェンリル
ターラキア山脈
シュルビー
サイアリーズ
フレイア
カブス
エクスター
レヴィ
ライオネル
クラナ
カーリング
セルベリア
ザウルステール
ヒューリアス
バロムリスト
ニーデンベルグ
フルセン
アヴァロン
ビーナス
樹海
メリシャント
オルシ
エレオノーラ
クレオンレーゼ
ペルセポネ
イシュタール
ゼビュロア
シェルファニール
シェンロン
西海航路
ダリシン
モンテルナモ
マリア
ローランス
ランチェロ
ラリマール
マルタ
カルロッタ

登場人物紹介

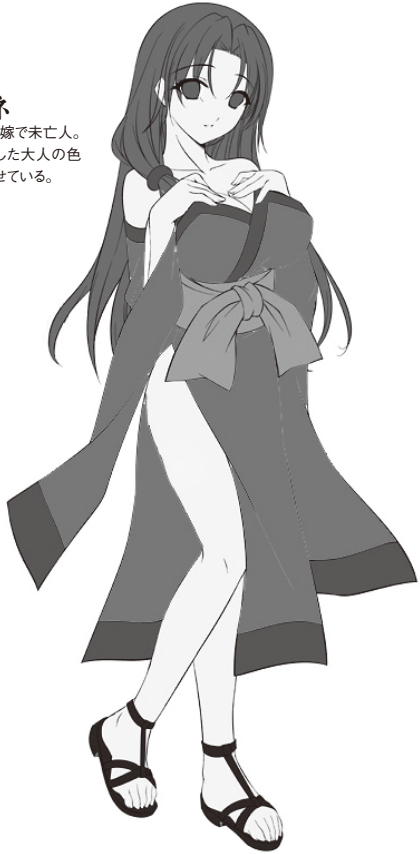
Characters

タチアナ

マルタで海女をしている若い娘。カイトにたびたびアプローチを仕掛けている。

シャルロット

ローランス王国の第二王女。乗っていた船が転覆し、漁村のマルタに流れ着く。



シズネ
カイトの兄嫁で未亡人。しっとりとした大人の色気を漂わせている。

ユズ
タチアナの海女仲間。小柄で元気いっぱいの少女。

アスカ
タチアナの海女仲間。美人だが不思議な言動をする。

モーリー
シャルロットに仕えている健気なメイド。

カイト
マルタの若き漁師。兄の仇の海龍を狙っている。

第一章　海の男　009
第二章　お姫様パニック　052
第三章　天然モノのハマグリ　089
第四章　お姫様のお願い　124
第五章　海龍狩り　164
第六章　女護が島　206

シズネの作ったシジミのみそ汁は、お世辞抜きに美味しかった。しかし、これは本来、兄が味わうべきものだった。そう思うと申し訳ない気分になる。

早くに両親を亡くしたカイトにとって、兄のライデンは親代わりであったのだ。

尊敬していたし、誇りでもあった。

三人娘がからかったように、シズネは初恋の相手である。しかし、彼女が兄と結婚するのは当然だと昔から思っていた。

それが現実となり、一抹の寂しさを感じたものの、心から祝福できた。

新婚の兄夫婦の家にいるのは気恥ずかしく、カイトは家を出ようとしたが、成人するまでは家にいろ、とライデンに止められていた。

おかげで彼女のお腹が順調に大きくなっていくのも間近で見て、我がことのように嬉しく、大事にしたものだ。

しかし、海龍狩りに失敗したライデンが亡くなると、シズネはショックのあまり流産してしまう。

愛する夫と、子供を同時に失い、落ち込んだ彼女を励ます言葉もなく、カイトはただ見守るしかなかった。

シズネの姿を見ているといつも思うのだ。

なぜ、兄ではなく、自分が食われなかったのか、と。

そう考えると、美味なみそ汁も、途端に苦く感じる。カイトは何度目になるかわからな

い質問をした。
「でも、義姉ちゃん。いつまでも俺なんかの面倒を見なくても……」
「わたしがいたら迷惑？」
「いえ、義姉ちゃんがいてくれて助かっています」
それは本当だ。炊事洗濯をしてもらって本当に助かっている。しかし、兄が亡くなったいま、シズネがこの家に留まり、カイトの面倒を見る理由はない。
「いまさら実家に帰ってもいる場所がないから、もう少し居させてくれない。自分の食いぶちは、自分で稼ぐから」
「別にそんなことを心配しているんじゃ。ただまだ義姉ちゃんは若くて綺麗なんだし、これからいくらでも良縁が……」
カイトの心配をよそに、シズネは柔和に笑った。
「うふふ、ありがと。でも、せめて、カイトくんがお嫁さんをもらうまでは居させて。そうじゃないとカイトくんの生活が心配で仕方ないわ」
根っからの海の男であるカイトに、家事の才能なんてあるはずがない。それがシズネから見ると危うくて仕方がないらしい。
「そう遠い日のことではないわ。タチアナちゃん、ユズちゃん、アスカちゃん。誰がカイトくんのお嫁さんになるか、楽しみだわ」
「ぶっ、誰も彼も勘違いしているみたいですけど、俺とあいつらはなんもないですから

っ！」
カイトは力いっぱい主張したが、シズネはまったく信じていない顔だ。
「あら、そうなの？」
「そうです。まったく、あいつら、いつもいつも俺のことをからかいやがって……」
なぜか知人連中は、カイトとあの馬鹿女三人組の関係を勘違いしている者が多い。シズネにまで勘違いされていると思うと、汗顔の至りだ。
シジミのみそ汁をがぶ飲みして不満を表明するカイトを、シズネは柔らかく窘(たしな)めた。
「あれであの子たちなりに慰めているつもりなのよ。カイトくん、ライデンさんが亡くなってから暗いもの」
「ふん、あいつらにそんな気遣いがあるとは思えませんね。単に楽しければいいんだあいつらは。義姉ちゃんも、あいつらの馬鹿に付き合うことはないんですよ」
「みんないい娘なんだけどな」
確かに一時のシズネの落ち込みようを知っているカイトとしては、今日のようなセクシー水着を着てお洒落を楽しむ日がこようとは信じられない。
元気になってきた、と歓ぶべきなのだろう。
タチアナ、ユズ、アスカの三人娘に少しは感謝すべきか、と思ったカイトだが、直後に頭を横に振るって否定した。
「いや、あいつらがアホなのは昔っからですから」

カイトは意地でも、幼馴染みたちの評価を上げるつもりはなかった。
というのも、やつらの悪戯には昔から散々に困らされてきたのだ。
子供の頃、裸になって遊んでいた感覚が抜けないのだろう。あいつらは、成長したいまでも、カイトの前では平気で素肌を晒す。いや、カイトの動揺するさまを楽しむために、わざと無防備な姿を晒すのだ。
それどころか、カイトが昼寝をしていた時、こっそり忍びよったこの三人娘は、褌を脱がし、好奇心のままに逸物を観察。あまつさえ、包皮を無理矢理剥き、痛みに泣き喚くカイトを笑いながら観察するという、悪魔のような所業までした。
以後カイトの包茎剥きは、彼女たちの間でブームになったらしく、カイトが昼寝をしていると、どこからともなく現れる彼女たちが包皮を剥いていく。おかげでおちおち疲れも癒やせない。
カイトにとって彼女たちは天敵だ。近寄りたくもないのだが、勘違いしている村の人々は、彼女たちとカイトを一緒にしたがる。
「あいつらいつまでもガキなまんまで」
「うふふ、男よりも女の方が大人なものだけどね、くっ」
義弟の愚痴を聞いて上品に笑っていたシズネが、不意に胸を押さえて蹲（うずくま）る。
「義姉ちゃん、大丈夫ですか？」
驚いて気遣うカイトに、シズネは苦しそうに応じた。

「ごめん、乳が張ってしまって……子供を産めなかったのに、母乳だけ出るの。恨めしいわね」
「はぁ……」
それは女にしかわからない苦しみだ。カイトは同情しながらも対応に困った。
「誰にやるわけでもなく母乳をただ搾り出して捨てる。この世でもっとも虚しい作業だわ」
苦しげに胸を押さえながら自虐的に吐き捨てたシズネだが、カイトの顔を見て慌てて表情を取りつくろって笑みを浮かべた。
「うふふ、そんな顔しないで。あっ、そうだ。よかったらカイトくん、手伝ってくれない？」
「えっ⁉」
「一人でやると虚しいけど、カイトくんが手伝ってくれると気が紛れると思うわ」
悪戯っぽい表情を浮かべたシズネは、カイトに顔を近づける。
「どお、わたしの母乳。搾るの手伝ってくれない？」
「いや、しかし、でも……」
しどろもどろになるカイトの反応を存分に楽しんでから、シズネは顔を引いた。
「……冗談よ」
寂しく笑ったシズネは、栓なきことを言ったと言いたげに顔を逸らした。
そして、母乳を捨てるために、洗面台か風呂場に向かおうとしたのだろう。立ち上がった。その歩み去ろうとするシズネの腕を、カイトは取った。

「待ってください。お手伝いします。シズネ義姉ちゃんがそれを望むのなら」
「えっ！　で、でも……いいの本当に？」
自分で誘っておいて戸惑うシズネに、カイトは真面目に応じた。
「はい。俺はシズネ義姉ちゃんを守るって兄さんの菩提に約束しました。それでシズネ義姉ちゃんの気が少しでも紛れるのでしたら、俺はなんでもします」
「……」
使命感に燃える義弟の迫力に押されたシズネは、目を泳がせて困惑していたが、やがて悪戯っぽく笑った。
「それじゃ、お願いしちゃおうかしら？」
「はい。お任せください」
真面目で無邪気な義弟を前に、瞳を妖しく輝かせたシズネは手桶を持って帰ってきた。
そして、カイトの前に正座をすると、浴衣の胸元をはだけさせる。
ボトリという重たげな擬音が聞こえてくるような感じで、双乳があらわとなった。同時に乳臭い香りがカイトの鼻腔をくすぐる。
（こ、これがシズネ義姉ちゃんのおっぱい？）
パンパンに張りつめた乳房にカイトは度肝を抜かれた。
白い肌だ。海女といっても、最近は身体を壊して仕事を休んでいたから、日焼けがすっかり落ちてしまったらしい。

健康的な色気を湛えていたタチアナ、ユズ、アスカといった連中の乳房とはまったく別ものだ。
隣のお姉さんであったシズネは、子供の頃のカイトを何度も風呂に入れてくれたことがある。
その頃から美人だったシズネだが、乳房はもっとあっさりしていた。
そして、何よりも違ったのは、梅色をした乳首。その先端からは白い液体が滴っている。
限界値を超えた母乳が溢れ出してしまっているのだ。
まさにミルクタンク。ミルクの塊を思わせる。
「そんなにじろじろ見ないで。母になりそこなって壊れた身体。醜いおっぱいなのよ」
「そんな……綺麗ですよ。シズネ義姉ちゃんのおっぱい」
必死に称賛するカイトに、右肩に束ねられた黒髪を整えながらシズネは首を横に振るった。
「カイトくんには、タチアナちゃん、ユズちゃんや、アスカちゃんがいるでしょ。あの子たちのおっぱい、本当に綺麗よ」
「だから、あいつらと俺は何もありませんって」
「うふふ、いまはそういうことにしておきましょうか」
一途に慕ってくる義理の弟の姿に、シズネは満更でもないという表情を浮かべる。
「それじゃ、わたしのおっぱい搾ってちょうだい」

「はい」
カイトが恐る恐る手を伸ばすと、シズネは慌てて止めた。
「前にいてはダメよ。母乳がカイトくんの身体にかかっちゃうわ。吸い出してくれるつもりならいいけど」
「あ、はい。すいません」
兄嫁の乳房を搾る決意をしたカイトだが、赤ん坊のように吸うという覚悟まではできていなかった。
赤面して慌ててシズネの背中に回る。
シズネは、その場に四つん這いになると、胸の下に手桶を置いた。
「それじゃお願いできるかしら」
「はい、おっぱいを掴みます」
シズネの背に覆いかぶさったカイトの鼻先に、湯上がりのしっとりとした黒い髪がくる。なんともいえない甘い匂いが鼻腔をくすぐった。
胸をドギマギさせながら、シズネの腋（わき）の下から両手を回し、白い乳房を掴んだ。
「あぁ」
シズネの艶めかしい声とともに、ずっしりとした重さを掌に感じた。
（う、シズネ義姉ちゃんは、いつもこんな重たいものをぶら下げて生活しているのか。…
…っ！　あ、やばい!?）

初めて手に取る乳房の重さに驚愕したハヤテだったが、同時に男としての不可抗力が起こってしまった。
誰もが認める硬派な海の男とはいえ、カイトも健全な青少年である。
初恋のお姉様を背後から抱き締め、その生の乳房を掴んだら、興奮してしまうのは仕方がないことだろう。
赤褌の中で、逸物がむくむくと大きくなってしまった。
しかも、手桶の上に双乳を晒し、四つん這いになったシズネの背後から抱き締め、搾乳していたカイトの股間は、不可抗力として、シズネのお尻に当たっていた。
カイトの赤褌と、シズネの浴衣。間にいくつかの布があったとはいえ、女性の尻の谷間に、男性の股間が密着してしまった。
水は低きに流れる。逸物もまた、むっちりとした尻の谷間にすぽんっと嵌(は)まってしまった。
(や、やばい。義姉ちゃんにバレる)
カイトは慌てたが、一度女の尻の谷間に嵌まってしまった逸物は、まるで磁力で吸い寄せられているかのように引き剥がすことができない。
シズネの方は、そんなこと全く気にしていないようだ。
(気づいてない？　女性のお尻って意外と鈍感なのだろうか？)
安堵したカイトは、自分の浅ましい欲望を誤魔化すためにも、一刻も早く、この搾乳を

終わらせるべきだ、と決意した。
本能の赴くままにとりあえず親指の腹と人差し指の腹で乳首を抓(つま)むと、残りの指と掌で乳房を思いっきり握り締める。次の瞬間、シズネは苦痛の悲鳴を上げた。
「あっ！　そんな出口を塞がれたまま押されたら破裂しちゃうわ」
「あ、すいません」
乳腺を締められた状態では、母乳は出ない。当然の理屈だ。
カイトは慌てて手を離した。
動揺を隠しきれないカイトに、頬を汗で濡らしたシズネが促す。
「難しく考えることはないわ。根元から搾り出すようにすればいいのよ。乳牛と同じ」
「そんな……」
卑下する義姉にカイトはかけるべき言葉がわからない。もちろん、漁師であるカイトは、乳牛など触ったこともない。
とりあえず、言われた通り、太い乳房の根元から、先端に向かってぎゅっと搾った。
「あん♪」
びゅ～～!!!
乳首の先端から、白い液体が飛沫を上げながら噴き出した。胸の下に置かれた手桶にミルク色の滴が溜まる。
（す、凄い。ほんとにシズネ義姉ちゃんのおっぱいから母乳が出た!?）

女体の神秘に感動したカイトであったが、同時に白い液体が噴き出すという現象は、男からすると、どうしても射精を連想させてしまうものがあるようだ。
カイトの心になんともいえない、ザワザワとした昂りが生じた。
その心の動きをぐっと我慢して、義弟として義務感を優先。両手に握った亡き兄の未亡人の乳房を二つ、交互に根元から搾り上げ続ける。
びゅ～、びゅ～、びゅびゅ～。
双乳の先端からは、まるで噴水のように白い液体が噴き出し続ける。
「あぁ……そんな一気に出そうとしないで、少しずつお願い」
辛そうなシズネの懇願を聞いて、カイトは搾乳の力を少し緩めた。
ダラダラダラダラ……。
それでも、母乳は小さな滝のように出る。
「あぁ、その調子でもっとぉ～」
「義姉ちゃん、変な声を出さないでください」
シズネの乱れた声に驚いたカイトが注意すると、シズネは恥ずかしそうに応じた。
「だって、母乳を出すのって気持ちいいのよ♪　ああ♪」
人間にとって体内から液体を出すという行為は、快感である。単に男が射精を気持ちいいと思うようなものだけではない。
放尿や、発汗、涙を流すという行為にも、人間は快感を覚えるものだ。そして、母乳を

出すという行為も格別に気持ちいいものらしい。まして、現在のシズネは溜まりに溜まった状態の母乳を噴き出しているのだ。その快感がいかほどのものか、男には想像できない。

「はぁん、カイトくんにおっぱい揉んでもらって、母乳を搾り出してもらっていると思ったら♪　はぁ凄い、こんなのってぇ♪」

カイトの中のシズネは、若い頃の清楚なお姉様像のままである。

それなのに現在のシズネは、義弟に背後から乳房を揉まれまくり、二つの乳腺から糸引くほどの濃厚な母乳を噴き出していた。さらにその頬はピンク色に染まり、黒い瞳は濡れ潤んでいた。

それは明らかに性的な快感を覚えてしまっている女の顔だったが、童貞であるカイトにはそのことを察することはできない。

興奮したシズネは、腰をグリグリと動かす。当然、尻の谷間に入っている逸物は振り回され、カイトの身をなんともいえない愉悦が駆け抜ける。

いわば尻コキ状態になってしまっているのだ。

（くっ、この体勢って、まるで俺がシズネ義姉ちゃんに襲いかかって、背後から犯しているみたいだ）

そう気づいてしまった瞬間、睾丸から溢れ出した精液が肉幹の中を駆け上がった。

（やばい、やばい、やばい。止まれ、止まれ、止まれ）

必死になって我慢する義弟の苦労も知らないで、乳房を揉みほぐされるシズネは、気持

ちよさそうに腰を振りまくる。
ついに臨界点を突破しそうになったカイトは、手を止めて注意を促す。
「ちょ、ちょっと、そんな腰を振られたら」
「どうしたの？　何か問題ある」
情けない声を出すカイトに、四つん這いのシズネは濡れた流し目をくれた。そのゾクゾクするような色香を前に、カイトは何も言えなくなってしまう。
「いえ……」
いまにも射精しそうなんです、などと口が裂けても言えるはずがない。押し黙るカイトに、妖艶なる義姉は促してきた。
「それじゃ、続けて。全部搾り取ってくれないと明日きついわ」
「はい」
色っぽい義姉に促されて、カイトは再び搾乳を開始した。
「はぁ～ん♪　気持ちいい。カイトくんに母乳を搾ってもらうの凄い気持ちいいわ」
再び義弟による搾乳が始まり、シズネは艶めかしい声を一段と張り上げた。同時にお尻がクネクネと動く。
「ああ、気持ちいいけど恥ずかしい。こんな、こんなビュービュー。カイトくんにおっぱい揉まれながら、こんな浅ましく出すなんて、わたし、凄い変態女になった気分♪」
「そんな、シズネ義姉ちゃんが変態だなんて、そんなに自分を卑下しないでください」

一刻も早く、この淫乱な幼馴染みを打ち抜きたいと、逸物が猛り狂っている。
その牡欲に身を任せようと、カイトが身を起こすのをタチアナが止めた。
「あ、待って。ここ船の上だし、足場が悪いから、あたしが上になるよ」
「そ、そうか……？」
確かに船の上では足場は悪かった。女性上位の方が安定するかもしれない。それになんだかんだいって、童貞少年である。いろいろと不安だ。
「仕方ねぇな、……好きにしな」
内心では心臓をバクバクさせながらも、精いっぱい男らしく振る舞ったつもりのカイトは、タチアナにすべてを任して、もう一度船で仰向けになった。
「それじゃ……」
タチアナの方も声を震わせながら、震える手でカイトの赤い褌を解いた。
ブルンッと唸りを上げて逸物があらわとなる。
それを見下ろしたタチアナは、瞳を輝かせて手に掴む。
「ああ、凄い。この肉銛が欲しかったのよ」
「この淫乱女が」
「カイトが相手だから淫乱になるんだもん」
淫乱と言われることをひそかに気にしているのか、拗ねたように応じたタチアナは、カイトの顔を見ながら腰を跨ぎ、左右の膝を船板につける。

その女の股間は、男の股間の上に来た。ギンギンにいきり立つ逸物が、タチアナの陰唇に添えられる。
「はぁ……はぁ……はぁ……それじゃ、カイトにあたしのハマグリをたんと食べさせてあげるからね」
「ああ、食わせてくれ」
ゴクリとカイトは喉を鳴らしてしまった。
「うふふ、カイト。好きよ」
海の女は、海の男に腰を落とした。
「ん……」
小さなうめき声とともに、いきり立つ逸物がタチアナの胎内に飲み込まれていく。
しかし、順調ではなかった。亀頭部が半分埋まったところで、タチアナの動きが止まる。
亀頭部の先端に確かに抵抗を感じる。
（これは……処女膜ってやつか）
カイトも女にそういうものがある、という噂は聞いたことがあった。
これを破られる時、女はかなりの激痛に見舞われるらしい。
タチアナの眉の間にできた皺を見ると、相当な激痛に耐えていることがわかる。
ジリジリジリジリ……。
「タチアナ、大丈夫か？」

「だ、大丈夫だけど……」
タチアナの頬に冷汗が浮かんでいる。どうやらここまできてぶちぬく踏ん切りがつかないらしい。
その中途半端な体勢で時は流れて、カイトの方が根負けした。
「まったくおまえらしくないな。俺の方がもう我慢できねぇよ」
獣性に支配されたカイトは、タチアナの左右に張った腰骨を掴むと、そのまま力任せに引き下ろした。
ブツッ！
はっきりと肉膜をぶち破った感覚が伝わってきた。そのあとは女の体重もあって、肉棒は、肉洞を押し広げながら、一気に最深部にまで達した。
「ああ……」
気の強い女であったはずのタチアナが悲痛な悲鳴を上げた。目元からボロボロと真珠のような涙が溢れている。
その光景に、カイトは焦った。自分が欲望のままに、女を陵辱してしまったという苦い後悔で、慌てて謝罪する。
「すまん。痛いか？」
「痛い！　無茶苦茶痛い!?　でも、だ、大丈夫。あたしがカイトの肉銛に貫かれたかったんだもん。あたしはカイトのハマグリなんだもん！」

痛みに耐えて叫ぶタチアナの姿に、カイトは心を鷲掴みにされるような気分になった。
（か、可愛すぎるだろ。こいつ……!?）
普段は強気な女の健気さに、くらくらしているカイトに向かって、涙目のタチアナは鼻を啜りながら質問してきた。
「そんなことより、わたしのハマグリを食べた感想は？」
「最高級のハマグリだ。これなら王宮の晩餐会にだって出せるぜ」
「もう……大袈裟なんだから」
カイトの軽口に、タチアナは満更でもないといった表情を浮かべる。
もっともお世辞を言ったつもりはない。硬派な海の男であるカイトは、思ったことだけを口にする。
（こ、これがタチアナのオマ〇コの中か……？　し、締まる。しかし、気持ちいい）
痛いほどに締まる膣洞だった。貝舌がいくつもあって、肉棒に絡みついてくる。
（で、出る。いや、待て。いきなり出すのは男としてのメンツにかかわる）
硬派な海の男として、すぐに出すのはみっともないと感じたカイトが必死に我慢していた時である。突如、船が大きく揺れた。
バシャッ！
船に仰向けになっているカイトの左右から水柱が上がった。
「うわっ!?　おまえらいつの間に……」

驚愕するカイトの左手から顔を出したのは、小柄な少女ユズだ。
「タチアナ、なに抜け駆けしているのかな？」
右手から顔を出したのは、クールな変人女アスカだ。
「友情より男なのね」
ユズとアスカだ。どうやら海の中を潜ってやってきたらしい。
「こ、これは……その……」
同性の幼馴染みたちのジト目を受けて、騎乗位中のタチアナは動揺をあらわにする。
「カイト、まさかこれで勝負あり、なんて言わないわよね」
「ここは公平にわたしたちのハマグリも味見するべきだと思う」
船は浅瀬にとまっていたから、海の底に立ったユズとアスカは、身を乗り出してカイトに詰め寄る。
「おまえら、何を言っているんだ⁉」
なんとなく言わんとしていることは伝わったが、その無茶ぶりにカイトは呆れた。
「ねぇ、カイト。あたしたちだってカイトのこと大好きなんだよ」
「巨乳だけが女じゃない」
ユズとアスカは、船の縁を持つと、交互に体重をかけ始めた。
当然、小さな船は左右に大きく揺れだす。
「きゃっ！　やめてぇ」

騎乗位で初体験中のタチアナは、必死に痛みに耐えている最中に、大きく左右に揺さぶられて、可愛らしい悲鳴を上げた。
カイトも例外ではない。船が大きく揺れることで、逸物もまた左右に揺れた。
「わ、わかった。わかったから。おまえらもまとめて面倒を見てやるから、やめろ」
自棄を起こしたカイトは青空に向かって叫んだ。
その悲鳴に似た宣言を受けて、ユズとアスカはようやく凶悪な脅しをやめた。
「うわ、さすがカイト。おっとこらしい♪」
「わたしはカイトの性の奴隷になる覚悟です」
小柄なユズとスレンダーなアスカは、軽やかに漁船に乗り込んできた。
「ちょ、ちょっと、あなたたち何するつもりよっ!?」
それをタチアナが見咎めて悲鳴を上げる。
「そんなの決まっているじゃない」
「我々も参加」
二人はカイトの左右で横になると、それぞれ自らの乳房をカイトの肩に押しつけてきた。
「タチアナには敵わないけど、あたしのおっぱいだって捨てたもんじゃないでしょ」
「女は胸じゃない」
腰にはタチアナが騎乗位で座っていて、左にユズ、右にアスカ。三人の女に囲まれて、カイトはだらだらと汗を流す。それは夏の日差しのせいではない。

「まったく、おまえらは。もうどうなっても知らないからな」
腹をくくったカイトは、緑色のワンピース水着のユズと、白いサラシを巻いたアスカの胸元を露出させた。
「「キャッ」」
二人はわざとらしい悲鳴を上げる。
大柄なタチアナは、乳房も大きい。小柄なユズは、前方に飛び出す活きのいい乳房だ。スレンダーで長身のアスカは、乳房そのものはあまり大きくない。
大きさに順位をつけると、タチアナ、ユズ、アスカという順番になるだろう。
乳首の大きさも形も色も違った。タチアナはぼってりとして大輪の花のよう。ユズは小粒だ。タチアナは豆粒のようだ。
もっとも、カイトにとって大きさの差などたいした問題ではない。三種三様の美乳に魅せられて生唾を飲んだ。
(まったく、みんないい具合に育ったよな)
三人とも幼馴染みだ。子供の頃から裸になって海で遊んできた仲である。いまさら裸など見ても珍しくもない、と強がってきたが、やはり、子供の時とは違う。
十代の後半になり、どの身体も瑞々しい牝の身体へと成長していた。
夏の日差しに輝く乳房は、いずれもフレッシュ、という表現がぴったりである。
かぶりついたら、レモンのようにすっぱいのではないか、と予想された。

（こいつらは俺のもんだ）
突如として強烈な独占欲に捕らわれたカイトは、とりあえずユズとアスカの乳房にむしゃぶりついた。
見た目や大きさ、肌触り、いずれも違うが、潮の匂いがする、ということは共通していた。
（悪くないな）
幼馴染みの合計六つの乳房を貪りながら、カイトは言いようのない高揚感に捕らわれていた。
小ぶりな体躯にしては高性能な乳房と、薄いシャープな乳房を存分に堪能したカイトは、彼女たちに命じる。
「今度はおまえらのハマグリ見せな」
「くっ、なんかカイトが急に強気になった」
「うふふ、こうやってあたしたちはカイトの肉奴隷にされていくのね。ぞくぞく♪」
口々に好き勝手ことを言いながらも、ユズとアスカは素直に身を起こし、股間をあらわにした。そして、船べりに腰をかけて膝を開いた。
二人とも陰毛は頭髪とよく似ている。ユズは栗色。アスカは黒色。
カイトは左右の手を伸ばすと、少女たちの陰唇を開いた。
女のもっとも隠すべき場所に、燦々と夏の強い日差しが降り注いでいるのだ。

「ああ、こんな日差しの中で恥ずかしい♪」
さすがの変な女アスカも羞恥に震えた。口から先に生まれたようなユズの方は、珍しく黙ってしまった。
小柄な体躯のユズは、陰唇も小さかった。そのためどこかシジミを連想させた。一方、アスカの陰唇は切れ長であり、赤身が目立つ。そのため赤貝を連想させた。
いずれも新鮮な海の幸である。
「おまえらの肉貝も糸引きまくりだな」
「バカ……」
「スケベ……」
「変態……」
カイトの感想に、タチアナ、ユズ、アスカは口々に罵ったが、羞恥を感じながらも、逃げようとはしなかった。
（確かに、俺は馬鹿でスケベで変態だな。この状況じゃ反論できねぇ）
タチアナの処女貝を味わいながら、さらに二つの処女貝を観察しているのである。
肉棒はビクビク震えていまにも射精しそうだ。しかし、あまり早いとまた遠慮なく侮られることだろう。
射精欲求を誤魔化すためにもカイトは、左右の少女たちの処女肉を弄りまくった。
「ああ、ああ……ああ」

「うん、そこ、そこ、そこ……」
破瓜の痛みに必死に耐えているタチアナは、喘ぎ声を出してくれないが、代わりに指マンされているユズとアスカが、気持ちいい声を喘いでくれた。
（まったく、淫乱女どもめ）
嬉しくなったカイトは、左右の女の肉貝柱を抓んで、集中的に扱き上げてやった。
「あ、そこ、そこいい、いい、いい」
「あぁ、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい」
ユズはもちろん、普段はクールなアスカまで頬を赤らめて我を忘れて喘いでいる。それが嬉しくてカイトの指マンは力が入った。
「いっくぅぅぅぅ!!!」
ブシャッ！
絶頂と同時に、ユズとアスカの肉貝は、飛沫を上げた。
霧状に噴き出した女たちの体液がカイトの視界で交錯する。そこに夏の強い日差しが浴びせられて、キラキラと輝き、虹が見えた。
なんとも淫らで幻想的な光景だ。
それを見ながらカイトもまた、限界に達していた。
どびゅ、どびゅ、どびゅゅゅゅゅゅ!!!
「あ、なに、ああ、凄い、きた、きた、きちゃった！」

破瓜の痛みに耐えていたタチアナは、肉銛の脈打ちとともに噴きつけられる熱い血潮に目を白黒させた。

※

「まだまだ終わりじゃないぞ。次はユズ。おまえが乗れ」

カイトの逸物は一度射精しただけでは、まったく収まらなかった。

破瓜の血で太腿を汚すタチアナが茫然としているうちに、カイトはユズを無理矢理同じ姿勢で結合させる。

ユズの小柄な胎内に、タチアナの破瓜の血で濡れた逸物がぶち込まれた。

「はぁぁぁぁ！」

ユズもまた破瓜の痛みに声にならない悲鳴を上げる。

（うお、ザラザラだ。あの口煩いユズもこうなっちまうと可愛いものだ）

同じ体勢だけに、膣洞の違いがよくわかる。大柄なタチアナに比べて、小柄なユズに相応しく、膣洞も狭い。しかし、肉襞も深く、凄まじい抵抗だ。

「イ、たい……」

ユズは破瓜の痛みに涙したが、カイトは容赦なく欲望のままに振る舞った。そして、二度目とは思えぬほどの大量の精液を注ぎ込んでやる。

「あぁぁぁぁぁ」

ユズの射精が終わると、カイトはアスカを抱き寄せた。

「うおぉぉぉッ!?」
シャルロットは慌てて腰を止めて、恐る恐るお伺いを立てる。
「す、すいません。前から一度、自分から思いっきり腰を使ってみたかったんです。このような腰使い身勝手でしょうか？」
「いや、好きにしていい。おまえが気持ちいいと俺も気持ちいいから」
油断した。清純派だったお姫様も、海の女たちと一緒にいることで、朱に染まったということだろう。
「ありがとうございます。それから、お姉さんたちみたいに、わたくしもいろいろな体位を試してみたかったんです。いいですか？」
「え、ああ……いいぞ。やってみな」
シャルロットの提案に多少驚いたが、特に止めねばならない理由もない。カイトは快諾した。
それを受けてシャルロットはいろいろと試し始める。
「うんしょ、うんしょ、あっ、ここ、ここ気持ちいい」
騎乗位は女が好きに動けるだけあって、自分の気持ちいい部分を発見できる。
どうやら淫乱な先妻たちのエッチを間近に見ていたので、いろいろと試してみたかったらしい。様々な体位に挑戦していたシャルロットだが、やがてお気に入りを発見した。
「あう、この体位。凄く気持ちいいですぅ」

シャルロットが気に入ったのは、騎乗位のまま左向きになり、カイトの左足を抱え上げた、いわゆる「宝船」の体位だった。

「それじゃ、そのまま好きなように腰を使ってみな」

「はい」

カイトの左足を抱えて、まるでパイズリするかのように胸の谷間に押しつけながら、シャルロットは鬼のように腰を使い始めた。

グチュリ、グチュリ、グチュリ……。

卑猥な水音を立てながら、逸物が左右に振られる。そのためヤワヤワとした肉襞によって、肉棒の左右を刺激された。

逸物は前後よりも、左右の方が多少は鈍い。だから、シャルロットがいくら激しく腰を振っても、多少の余裕は保てた。

もっとも、それはあくまでも逸物への直接的なダメージが少ないというだけであり、お姫様が夢中になって腰を振るっているという視覚的な衝撃が弱まるものではない。

「あぁん、気持ちいいです。わたくし、カイト様が好き。カイト様のぶっといお大事が大好き。硬くてごつごつしていて、たまりません。わたくし、もうこのおっきくて極太のお大事なくては生きていけません」

欲望の赴くままに高速腰振りを続けるシャルロットに、余韻に浸りながら見学していた海女たちも驚く。

「うわ、えげつな……」
「庶民なんかよりも、王族の方が淫乱だっていう噂は真実だったらしい」
ユズとアスカが囁きあい、タチアナが質問する。
「まさかとは思うけど、あんたってさ、カイトのこのデカマラ見て、駆け落ちしようとか思いついたの？」
「はい。カイト様は男らしくてお大事は大きくて、絶倫。これぞ女の理想です」
「姫様、はしたない……」
モーリーはショックを受けたようだが、他の女たちはわっと沸いた。
「正直でよろしい！　気に入った」
ユズは叫ぶ。
「わたしたちはみんな、デカマラの奴隷女」
アスカは無意味に格好つけながら、卑猥なことを言う。
「カイトくんのおちんちんに惚れちゃった女同士、みんな仲よく楽しみましょう」
シズネが、シャルロットの背後から、乳房ごと抱き締めた。
「はぅ、よろしくお願いします」
こうして、女たちは乱交に参加してきた。
それをシャルロットは嫌がるどころか積極的に受け入れる。どうやら彼女はこうやってみんなでワイワイしながら乱交を楽しむのも好きなようである。

しかし、カイトの方がたまったものではない。必死に我慢しているところに、耳元からタチアナが声をかけてきた。
「カイト、そう簡単に出したらダメよ。女はまだまだいるんだからね」
「おまえら、まだやる気かよ」
呆れるカイトの耳元に息を吹きかけながらタチアナは応じる。
「当然。こんな凄いの見せつけられたら、あたしたちも負けてらんないわ」
「そうそう、翡翠海の荒波で鍛えられた女の腰使いを見せつけてあげないとね」
「絶対、負けない」
ユズやアスカも、ライバル意識を刺激されているようである。
そこにシャルロットの乳房を背後から揉んでいたシズネが、声をかけてきた。
「そういえば、カイトくん聞いて。どうやらわたし、もう母乳は出なくなったみたいなの」
「それはよかったです。あ、でも、すぐに俺がまた出るようにしてあげますよ」
「うふ、まぁ、カイトくんったら、嬉しい♪」
その会話に触発されたのだろう。夢中になって腰を振るっていたシャルロットが叫んだ。
「あう、わたくしも、わたくしも、カイト様の、カイト様の子供が欲しいですぅぅぅぅぅぅぅぅ!!!」
ビクビクビクビク！
愛らしい肢体が激しく痙攣したと思ったら、膣洞もまた肉棒を絞り上げてきた。

その激しい絶頂にカイトもまた、搾り取られる。
ドビュュュュュュュュュ!!!
「あああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
南国の海に響きわたる女たちの嬌声は消えることがなかった。

※

かくしてローランス王国の第二王女シャルロットは、王族の身分を捨てて、一介の漁師のもとに嫁いだ。
その所業を、せっかくの幸運を捨てた馬鹿な女と噂する者もあったという。
しかし、人の幸せとは本人にしかわからないものだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

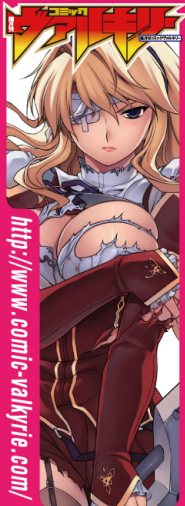
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！